



地域の実情を踏まえた体験活動事業（特色化事業）

報告書

令和7年3月

国立磐梯青少年交流の家

国立中央青少年交流の家

国立那須甲子青少年自然の家

はじめに

近年、青少年を取り巻く環境の多様化・複雑化とともに、新型コロナウイルス感染症の流行を背景として、青少年が自然の中で五感を働かせて行う体験活動の重要性が指摘されています。

このような状況の中、国立青少年教育振興機構では、我が国の青少年教育の振興及び青少年の健全育成を図るナショナルセンターとしての役割を果たすため、国立の青少年教育施設の所在する地域の実情に応じ、その特色を活かした事業を実施しています。また、これらの事業で行ったプログラムをより多くの青少年に提供するため、青少年教育施設が利用団体の受入の際に提供する活動プログラムとして活用できるよう学習方法をまとめ、教材等の作成も行っています。

昨今は、青少年教育施設は体験活動の機会と場を提供するという既存の役割のみならず、次代を担う青少年の自立に向けた健全育成を総合的に推進し、地域住民のニーズに沿った形で分野横断的な取組を行うことが望まれています。

このため、国立の青少年教育施設のみならず、県立や市立、民間の所有する青少年教育施設が、地域の実情に即した専門性の高い体験活動プログラムを開発することに寄与することを目的に、地域の特色を活かした教育事業の実施内容や活動プログラムとしての活用方法を整理するとともに、体験活動として提供することによる教育効果の分析や、有識者からの評価を得て、今般報告書としてまとめるにいたったものです。

本報告書においては、令和3年度から令和6年度にかけて、国立磐梯青少年交流の家、国立中央青少年交流の家及び国立那須甲子青少年自然の家が行った取り組みを紹介し、全国の青少年教育施設が、今後地域の実情を踏まえた活動プログラムを開発し、利用者に提供する際に参考となるようまとめています。

関係者におかれましては、これまでの各青少年教育施設の取組とあわせて、本報告書を参考にしつつ、青少年教育施設の提供する体験活動の一層の充実に活用いただきたいと考えています。

国立磐梯青少年交流の家
国立那須甲子青少年自然の家
所 長 小 野 保

目次

国立磐梯青少年交流の家

健康的な生活習慣のきっかけづくり～食育と運動習慣づくり～	1
------------------------------------	---

- I. 趣旨
- II. 指導のポイント
- III. 教材・教具
- IV. 活動プログラム（アクティビティマニュアル）
- V. 実践活動・活用事例
- VI. 効果
- VII. 有識者のコメント
- 引用文献・参考文献・注

国立中央青少年交流の家

SDGs への理解を深め、新しい社会の担い手となる教育の推進	23
--------------------------------------	----

- I. 趣旨
- II. 指導のポイント
- III. 教材・教具
- IV. 活動プログラム（アクティビティマニュアル）
- V. 実践活動・活用事例
- VI. 効果
- VII. 有識者のコメント
- VIII. その他
- 引用文献・参考文献・注

国立那須甲子青少年自然の家

障がいのある子供たちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進	36
-------------------------------------	----

- I. 趣旨
- II. 指導のポイント
- III. 教材・教具
- IV. 活動プログラム（アクティビティマニュアル）
- V. 実践活動・活用事例
- VI. 効果
- VII. 有識者のコメント
- VIII. その他
- 引用文献・参考文献・注
- 資料

健康的な生活習慣のきっかけづくり ～食育と運動習慣づくり～

国立磐梯青少年交流の家

I 趣旨

研究テーマ「健康的な生活習慣のきっかけづくり～食育と運動習慣づくり～」にもとづき、特に運動習慣づくりについて、コロナ禍を踏まえた情勢や登山人口の減少、児童生徒の体力の低下などを鑑み、親しみやすい登山の在り方について検討し、開発を試みた。

1. 磐梯山について

磐梯青少年交流の家がある磐梯朝日国立公園は、日本で2番目に大きな国立公園である。磐梯山の主峰大磐梯の山頂（1,816m）から北東に1.5kmに櫛ヶ峰の山頂（1,636m）が、東南東1.5kmに赤埴山の山頂（1,430m）がある。

2. 登山プログラムについて

登山プログラムは困難を乗り越える力や達成感や努力の大切さ、自然の偉大さなどを育むことができるため、青少年教育に役立つプログラムである。

磐梯山登山は活動プログラムの中でも長年にわたって活用されており、令和5年度までは「八方台登山口」と山頂間を往復するルート（移動を含めて約8時間）を提供してきた。

3. 登山プログラム利用者の変遷

当交流の家での過去5年間の磐梯山登山プログラム利用者は、以下のようになっている。

表1 令和5年までの磐梯山登山プログラムの実施回数と利用者数

年度	実施回数（回）	利用者数（人）
平成 30 年	35	1,064
令和 元年	42	2,066
令和 2 年	6	126
令和 3 年	5	281
令和 4 年	12	337
令和 5 年	16	487

コロナ禍の令和2年から極端に実施回数が減っているが、コロナ感染防止対策の規制等の緩和以降も実施回数は伸びていない。そこで、学校団体が登山プログラムを利用しない理由について複数の学校より聞き取りを行った。聞き取り調査の結果「学校団体では1泊2日の利用が主流となり、往復8時間近くかかる登山プログラムを日程の中に計画するのが難しくなったから。」「コロナ禍で落ちた児童生徒の体力を考えると、登山は身体への負担が大きいから。」「働き方改革によって、教員の負担が大きいプログラムを選択しなくなってきたから。」などの意見を聴取することができた。

以上の聞き取り結果から、学校団体に登山プログラムを利用してもらうためには、磐梯山の登山プログラムの再考、開発が必要不可欠となった。

4. 開発したプログラム

- ①磐梯山登山①（八方台登山口往復コース） 約 8 時間
- ②磐梯山登山②（猪苗代スキー場～八方台登山口コース） 約 7 時間
- ③磐梯山登山③（猪苗代スキー場往復コース） 約 4 時間

表 2 登山プログラムコースごとの特徴

登山プログラム名	磐梯山登山① 八方台登山口往復コース	磐梯山登山② 猪苗代スキー場～八方台登山口コース	磐梯山登山③ 猪苗代スキー場往復コース
登山開始地点	八方台	猪苗代スキー場	猪苗代スキー場
登山終了地点	八方台	八方台	猪苗代スキー場
山頂の標高 (m)	1816	1816	1427
登山開始地点の標高 (m)	1194	1097	1097
標高差 (m)	622	719	330
道のり (m)	7000	5800	2400
所要時間（往路）（時間）	3	3.5	1.5
所要時間（復路）（時間）	2	2	1.5
リフトの利用（往路）	無し	有り	有り
リフトの利用（復路）	無し	無し	有り

①は従来の登山プログラムである。

②③は新設の登山プログラムである。②は往路でスキー場の夏季登山リフトを利用することにより、標高 1,100m 地点まで約 20 分で進むことができる。リフト降り場から猪苗代湖を一望できるとともに、登山の道中では岩肌がむき出しになった磐梯山の裏側を眺めることもできる。往路（登り）と復路（下り）で見る景色が異なるため、登山の楽しさが増加すると考えた。このコースは、令和 6 年度の教育事業「磐梯地域探究プログラム」で実践した。

③はスキー場の夏季リフトを往復で使用する。このコースは令和 5 年度及び 6 年度の教育事業「アクティブ・ジオキャンプ」で実践しており、往路だけでリフトを利用する時よりもさらに身体的な疲労軽減、登山時間を短縮できる。また、参加者が復路のリフトから眼下に広がる猪苗代湖を堪能することができた。

磐梯山登山の活動プログラムを 3 コースにすることによって、参加者の実態に応じてコースを選択することが可能になる。そのため、従来よりも登山プログラムの利用が増えるのではないかと考えた。

Ⅱ 指導のポイント

1. 交流の家職員

- ①利用団体に登山プログラムの3コースの概略を提示し、活動の目的や利用者の実態に応じて、団体側でコースを選択できることを説明する。
- ②利用団体との事前の打合せや調整の中で、登山の所要時間や危険箇所等について説明する。
- ③研修指導員と利用団体との中継ぎをして、詳細な打合せができるようにする。
- ④登山出発日の朝と登山実施後の打ち合わせにて司会を担当する。また、打合せで得られた情報を記録に残し、他の職員と共有する。

2. 研修指導員

- ①登山出発日の朝の打合せにて、団体代表者にコース等について説明する。
- ②登山実施最中のペース配分や安全指導等を行う。
- ③登山実施後の打合せにて団体へ反省点を伝え、振り返りをする。

Ⅲ 教材・教具

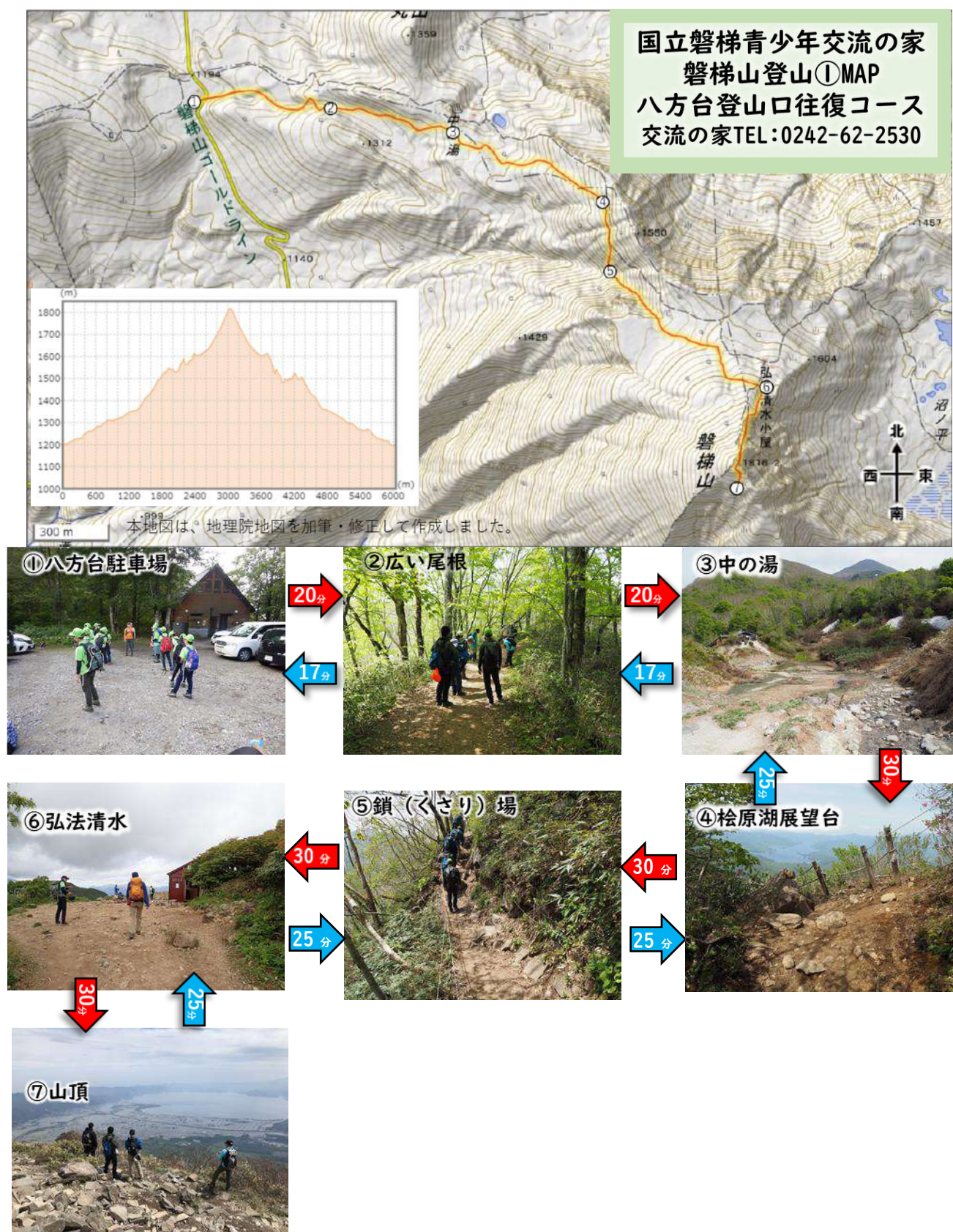


図1 磐梯山登山①MAP 八方台登山口往復コース



図2 磐梯山登山②MAP 猪苗代スキー場～八方台登山口往復コース

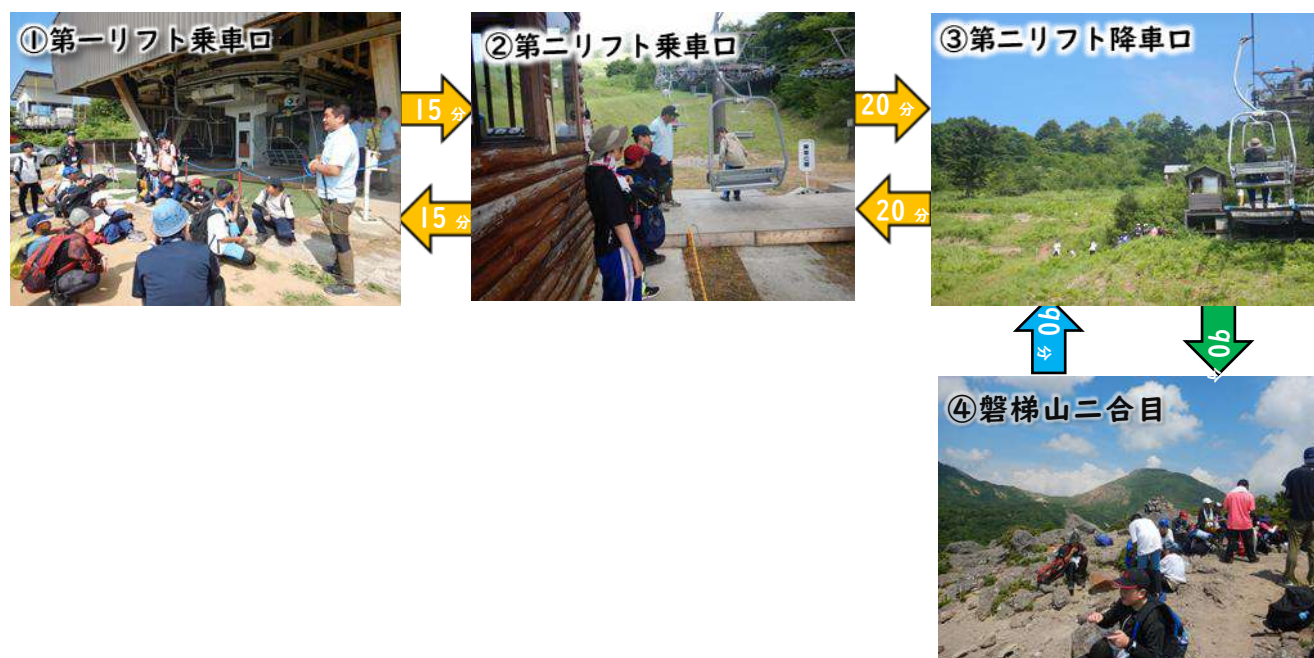


図3 磐梯山登山③MAP 猪苗代スキー場往復コース

Ⅳ 活動プログラム（アクティビティマニュアル）



1. 磐梯山登山①（八方台登山口往復コース）

（活動時間の目安：8時間）

概要	山頂の高さが 1800m でスタート地点の八方台登山口の標高が 1200m なので、山頂との標高差は約 600m の高低差が少ないコースです。晴天時には山頂から猪苗代湖が一望できます。			
ねらい	集団で自然体験活動をすることで生きる力や自己有用感を育むとともに、心身の健康を図ります。			
条件	対象	小学 5 年生～	人数	制限はないが 1 クラスに 1 名の引率者が必要
	時期	6 月～ 9 月	実施判断	雷注意報時は中止
準備物	交流の家（貸出物品）	団体（準備物）		個人（準備物）
	☐ 熊鈴 ☐ 地図・登山マップ ☐ 方位磁針 ☐ トランシーバー（研修指導員用）	☐ 救急セット ☐ 登山計画書 ☐ 非常時用簡易トイレ ☐ 非常用水・非常食 ☐ 携帯電話・時計		☐ デイパック ☐ 長袖・長ズボン ☐ 帽子、水筒（水 1 ℓ 以上） ☐ 雨具
登山ルート	 ① 八方台登山口（登山ポストがある） ② 広い尾根（休憩箇所） ③ 中の湯（火山性ガスが出ているので長居しない） ④ 桧原湖展望台（休憩箇所） ⑤ 鎖場（くさりば：崖に注意） ⑥ 弘法清水（こうぼうしみず）（休憩箇所・山小屋と簡易トイレ有り） ⑦ 磐梯山山頂（休憩箇所）			

引率者の役割	団体責任者	・研修指導員との事前打合せと当日の実施判断・中断の決定をします。 ・交流の家に下記4地点で連絡を行います。 (登山前の八方台登山口・弘法清水小屋・頂上・下山後の八方台登山口)
	グループ責任者	・出発前と活動中及び到着後の人数の把握と健康状態の確認をします。 ・研修指導員からの指示や注意事項などを参加者に伝えます。 (学校では担任が一般的)
	救急係	救急セットの携帯と応急手当をします。
	本部係	交流の家又は登山口で緊急車両を用意して待機し、途中下山者対応に備えます。
研修指導員の役割		・活動当日の朝に交流の家で団体責任者と打合せをします。 ・登山口で参加者に安全面についての説明をします。 ・活動中は道案内や危険個所で状況に応じた指示を出します。 ・下山後に交流の家で団体責任者と振り返りをします。
交流の家職員の役割		・物品の貸出しや回収を行います。 ・団体責任者からの連絡を受け取ります。 ・当日の朝の打合せ、下山後の振り返りの進行を行います。
引率者確認事項		【施設入所前】 ・登山ルートと時間配分の確認をします。登山日の活動をゆとりのある計画にしてください。 ・入所40日前までに指導員依頼(活動日程表の提出)をします。目安は1クラスに対して指導員1名となります。 ・登山当日までに日程・登山形態(安全管理・留意事項欄参照)を計画して登山計画書(届)を2部作成します。(登山ポスト又は猪苗代警察署用に1部、交流の家用に1部) ・事前に役割分担や参加者への指導(安全指導、装備確認)などを行います。 ・活動日の天候等により登山を中止する場合は登山前日の16時までに交流の家に連絡をします。 【施設入所後】 ・交流の家に登山計画書(届)を1部提出します。 ・登山時の持ち物や実施判断についての確認をします。食堂で弁当を注文した場合は、受け渡し場所や時刻も確認します。

引率者確認事項

【登山当日～登山口到着】

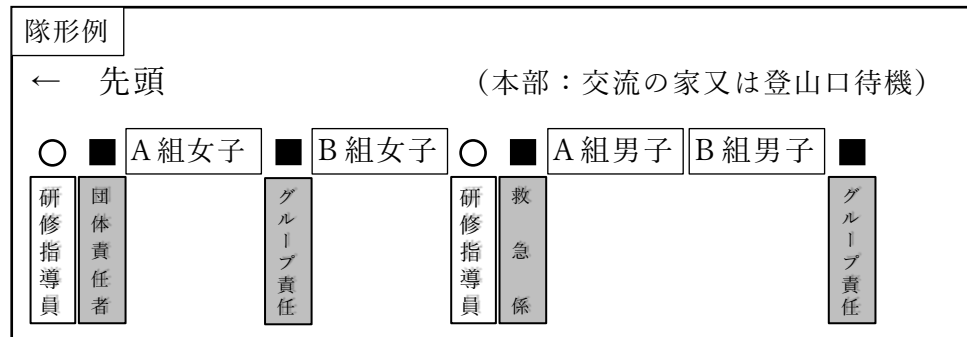
- ・団体責任者は研修指導員と7時45分に事務室にて実施の判断をします。登山判断基準は下記表のとおりです。実施決定後に打合せを行います。
- ・判断基準に該当する天候の場合は、安全管理上登山の実施を中止としています。また安全確保のために登山の途中で下山する場合があります。

警報または注意報	大雨	強風	雷
	大雪	暴風	火山
降水量	5mm/h以上		
風速	10m/s以上		
その他	著しく気象の変化がある		
	利用者からの中止の申し入れ		
	交流の家として中止と判断したとき		

- ・団体と研修指導員は団体の車両で八方台登山口に移動します。
- ・登山口到着後にグループ責任者は参加者の人数と体調の確認・把握をします。貸出物品を参加者に渡します。
- ・グループ責任者は参加者の態勢を整え、研修指導員の説明（主に安全面について）を参加者と一緒に聞きます。

【登山中】

- ・登山隊形については、引率者の配置は先頭に1名（団体責任者）～中継1名以上～後尾1名としてください。（下記例参照）



- ・グループ責任者は参加者のコースの逸脱、石を蹴る、走る、研修指導員の説明を聞かないなどの危険行為がないように指導してください
- ・グループ責任者は休憩時などに参加者の点呼と健康観察を行います。また、研修指導員と適宜相談をして安全に活動できるように参加者を指導します。
- ・グループ責任者は水分補給を徹底させ、熱中症対策を講じてください。
- ・グループ責任者はペースが遅くなった参加者がいた場合に研修指導員と団体責任者へ状況を伝えて、指示を仰ぎます。
- ・団体責任者は傷病者が発生した場合に救急係に応急手当の指示を出し、研修指導員と相談して登山継続か下山するかを判断します。下山する場合は本部係とグループ責任者に指示を出すなど傷病者対応をします。また、天候の急変その他の事情が発生した場合は研修指導員と相談して、

	途中下山の判断と指示を出します。 【下山後】 ・グループ責任者は参加者の人数と体調の確認をします。 ・グループ責任者は貸出物品を事務室に返却します。 ・団体責任者は事務室で研修指導員と振り返りを行います。
その他 留意事項	・研修指導員の都合によりご希望の人数が手配できない場合があります。 ・参加者は植物や樹木などを採集せずに、ごみは持ち帰ってください。 ・参加者は森の中など虫が出る所が多くありますので、虫に刺されない対策（虫よけスプレー、長袖長ズボン）をしてください。

2. 磐梯山登山②（猪苗代スキー場～八方台登山口コース）
（活動時間の目安：約7時間）



概要	夏季登山リフトを利用することにより、標高 1100m まで約 30 分で進むことができます。リフト降り場から猪苗代湖を一望できるとともに、道中では岩肌がむき出しになった磐梯山の裏側を眺めることもできます。 往路（登り）と復路（下り）で見る景色が異なるため、登山の楽しさが増加します。			
ねらい	集団で自然体験活動をすることで生きる力や自己有用感を育むとともに、心身の健康を図ります。			
条件	対象	小学 5 年生～	人数	20 名以上で実施可能 1 クラスに 1 名の引率者が必要
	時期	7 月～10 月	実施判断	雷注意報時は中止
準備物	交流の家（貸出物品）	団体（準備物）		個人（準備物）
	☐ 熊鈴 ☐ 地図・登山マップ ☐ 方位磁針 ☐ トランシーバー（研修指導員用）	☐ 救急セット ☐ 登山計画書 ☐ 非常時用簡易トイレ ☐ 非常用水・非常食 ☐ 携帯電話・時計		☐ デイバック ☐ 長袖・長ズボン ☐ 帽子、水筒（水 1 ℓ 以上） ☐ 雨具
登山ルート	 ①第一リフト乗車口 ②第二リフト降車口 ③沼ノ平（休憩箇所） ④弘法清水（休憩箇所・山小屋と簡易トイレ有り） ⑤磐梯山山頂（休憩箇所） ⑥中の湯（火山性ガスが出ているので長居しない） ⑦八方台登山口			

引率者の役割	団体責任者	・研修指導員との事前打合せと当日の実施判断・中断の決定をします。 ・交流の家に下記4地点で連絡を行います。 (猪苗代スキー場・弘法清水小屋・頂上・下山後の八方台登山口)
	グループ責任者	・出発前と活動中及び到着後の人数の把握と健康状態の確認をします。 ・研修指導員からの指示や注意事項などを参加者に伝えます。 (学校では担任が一般的)
	救急係	救急セットの携帯と応急手当をします。
	本部係	交流の家又は登山口で緊急車両を用意して待機し、途中下山者対応に備えます。
研修指導員の役割		・活動当日の朝に交流の家で団体責任者と打合せをします。 ・登山口で参加者に安全面についての説明をします。 ・活動中は道案内や危険個所で状況に応じた指示を出します。 ・下山後に交流の家で団体責任者と振り返りをします。
交流の家の職員の役割		・物品の貸出しや回収を行います。 ・団体責任者からの連絡を受け取ります。 ・当日の朝の打合せ、下山後の振り返りの進行を行います。
引率者確認事項		【施設入所前】 ・登山ルートと時間配分の確認をします。登山日の活動をゆとりのある計画にしてください。 ・入所40日前までに指導員依頼(活動日程表の提出)をします。目安は1クラスに対して指導員1名となります。 ・登山当日までに日程・登山形態(安全管理・留意事項欄参照)を計画して登山計画書(届)を2部作成します。(登山ポスト又は猪苗代警察署用に1部、交流の家用に1部) ・事前に役割分担や参加者への指導(安全指導、装備確認)などを行います。 ・活動日の天候等により登山を中止する場合は登山前日の16時までに交流の家に連絡をします。 【施設入所後】 ・交流の家に登山計画書(届)を1部提出します。 ・登山時の持ち物や実施判断についての確認をします。食堂で弁当を注文した場合は、受け渡し場所や時刻も確認します。

引率者確認事項

【登山当日～登山口到着】

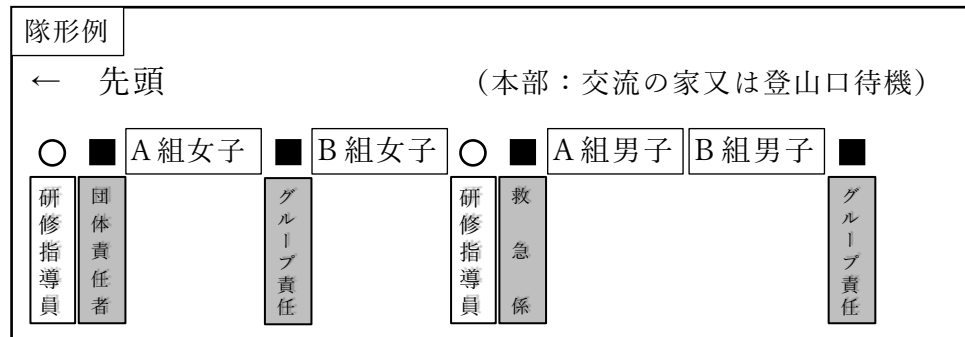
- ・団体責任者は研修指導員と7時45分に事務室にて実施の判断をします。登山判断基準は下記表のとおりです。実施決定後に打合せを行います。
- ・判断基準に該当する天候の場合は、安全管理上登山の実施を中止としています。また安全確保のために登山の途中で下山する場合があります。

警報または注意報	大雨	強風	雷
	大雪	暴風	火山
降水量	5mm/h以上		
風速	10m/s以上		
その他	著しく気象の変化がある		
	利用者からの中止の申し入れ		
	交流の家として中止と判断したとき		

- ・団体と研修指導員は団体の車両で八方台登山口に移動します。
- ・登山口到着後にグループ責任者は参加者の人数と体調の確認・把握をします。貸出物品を参加者に渡します。
- ・グループ責任者は参加者の態勢を整え、研修指導員の説明（主に安全面について）を参加者と一緒に聞きます。

【登山中】

- ・登山隊形については、引率者の配置は先頭に1名（団体責任者）～中継1名以上～後尾1名としてください。（下記例参照）



- ・グループ責任者は参加者のコースの逸脱、石を蹴る、走る、研修指導員の説明を聞かないなどの危険行為がないように指導してください
- ・グループ責任者は休憩時などに参加者の点呼と健康観察を行います。また、研修指導員と適宜相談をして安全に活動できるように参加者を指導します。
- ・グループ責任者は水分補給を徹底させ、熱中症対策を講じてください。
- ・グループ責任者はペースが遅くなった参加者がいた場合に研修指導員と団体責任者へ状況を伝えて、指示を仰ぎます。
- ・団体責任者は傷病者が発生した場合に救急係に応急手当の指示を出し、研修指導員と相談して登山継続か下山するかを判断します。下山する場合は本部係とグループ責任者に指示を出すなど傷病者対応をします。また、天候の急変その他の事情が発生した場合は研修指導員と相談して、

	途中下山の判断と指示を出します。 【下山後】 ・グループ責任者は参加者の人数と体調の確認をします。 ・グループ責任者は貸出物品を事務室に返却します。 ・団体責任者は事務室で研修指導員と振り返りを行います。
その他 留意事項	・研修指導員の都合によりご希望の人数が手配できない場合があります。 ・参加者は植物や樹木などを採集せずに、ごみは持ち帰ってください。 ・参加者は森の中など虫が出る所が多くありますので、虫に刺されない対策（虫よけスプレー、長袖長ズボン）をしてください。

3. 磐梯山登山③（猪苗代スキー場往復コース）

（活動時間の目安：約4時間）



概要	標高 1427m の磐梯山二合目を目指すコースです。夏季登山リフトを利用することにより、標高 1100m まで 20 分、リフト降り場から磐梯山二合目まで約 1 時間で進むことができます。また、下りでもリフトを利用することにより、疲れた体を癒しながら目の前に広がる猪苗代湖を楽しむことができます。			
ねらい	集団で自然体験活動をすることで生きる力や自己有用感を育むとともに、心身の健康を図ります。			
条件	対象	小学 5 年生～	人数	制限はないが 1 クラスに 1 名の引率者が必要
	時期	山開き後～ 9 月	実施判断	雷注意報時は中止
準備物	交流の家(貸出物品)	団体（準備物）	個人（準備物）	
	☐熊鈴 ☐地図・登山マップ ☐方位磁針 ☐トランシーバー（研修指導員用）	☐救急セット ☐登山計画書 ☐非常時用簡易トイレ ☐非常用水・非常食 ☐携帯電話・時計	☐デイバック ☐長袖・長ズボン ☐帽子、水筒（水 1 ℓ 以上） ☐雨具	
登山ルート	 本地図は、地理院地図を加筆・修正して作成しました。 ①第一リフト乗車口 ②第二リフト乗車口（トイレ有り） ③第二リフト降車口 ④磐梯山二合目（休憩箇所）			

引率者の役割	団体責任者	・研修指導員との事前打合せと当日の実施判断・中断の決定をします。 ・交流の家に下記3地点で連絡を行います。 (猪苗代スキー場・頂上・下山後の猪苗代スキー場)
	グループ責任者	・出発前と活動中及び到着後の人数の把握と健康状態の確認をします。 ・研修指導員からの指示や注意事項などを参加者に伝えます。 (学校では担任が一般的)
	救急係	救急セットの携帯と応急手当をします。
	本部係	交流の家又は登山口で緊急車両を用意して待機し、途中下山者対応に備えます。
研修指導員の役割		・活動当日の朝に交流の家で団体責任者と打合せをします。 ・登山口で参加者に安全面についての説明をします。 ・活動中は道案内や危険個所で状況に応じた指示を出します。 ・下山後に交流の家で団体責任者と振り返りをします。
交流の家職員の役割		・物品の貸出や回収を行います。 ・団体責任者からの連絡を受け取ります。 ・当日の朝の打合せ、下山後の振り返りの進行を行います。
引率者確認事項		【施設入所前】 ・登山ルートと時間配分の確認をします。登山日の活動をゆとりのある計画にしてください。 ・入所 40 日前までに指導員依頼（活動日程表の提出）をします。目安は1クラスに対して指導員1名となります。 ・登山当日までに日程・登山形態（安全管理・留意事項欄参照）を計画して登山計画書（届）を2部作成します。（登山ポスト又は猪苗代警察署用に1部、交流の家用に1部） ・事前に役割分担や参加者への指導（安全指導、装備確認）などを行います。 ・活動日の天候等により登山を中止する場合は登山前日の16時までに交流の家に連絡をします。 【施設入所後】 ・交流の家に登山計画書（届）を1部提出します。 ・登山時の持ち物や実施判断についての確認をします。食堂で弁当を注文した場合は、受け渡し場所や時刻も確認します。

引率者確認事項

【登山当日～登山口到着】

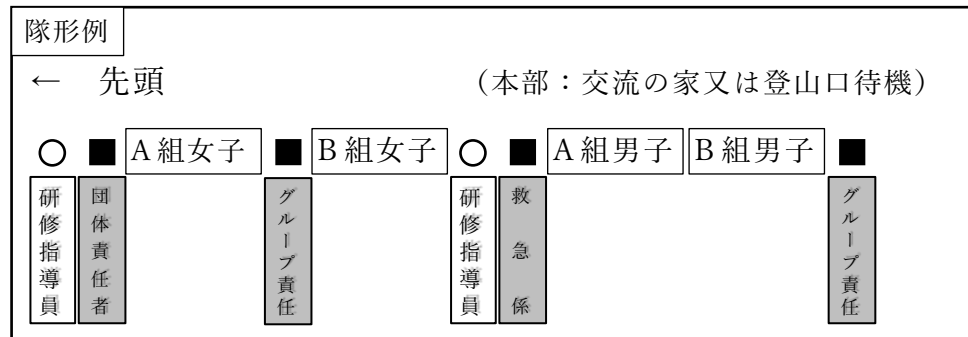
- ・団体責任者は研修指導員と7時45分に事務室にて実施の判断をします。登山判断基準は下記表のとおりです。実施決定後に打合せを行います。
- ・判断基準に該当する天候の場合は、安全管理上登山の実施を中止としています。また安全確保のために登山の途中で下山する場合があります。

警報または注意報	大雨	強風	雷
	大雪	暴風	火山
降水量	5mm/h以上		
風速	10m/s以上		
その他	著しく気象の変化がある		
	利用者からの中止の申し入れ		
	交流の家として中止と判断したとき		

- ・団体と研修指導員は団体の車両で八方台登山口に移動します。
- ・登山口到着後にグループ責任者は参加者の人数と体調の確認・把握をします。貸出物品を参加者に渡します。
- ・グループ責任者は参加者の態勢を整え、研修指導員の説明（主に安全面について）を参加者と一緒に聞きます。

【登山中】

- ・登山隊形については、引率者の配置は先頭に1名（団体責任者）～中継1名以上～後尾1名としてください。（下記例参照）



- ・グループ責任者は参加者のコースの逸脱、石を蹴る、走る、研修指導員の説明を聞かないなどの危険行為がないように指導してください
- ・グループ責任者は休憩時などに参加者の点呼と健康観察を行います。また、研修指導員と適宜相談をして安全に活動できるように参加者を指導します。
- ・グループ責任者は水分補給を徹底させ、熱中症対策を講じてください。
- ・グループ責任者はペースが遅くなった参加者がいた場合に研修指導員と団体責任者へ状況を伝えて、指示を仰ぎます。
- ・団体責任者は傷病者が発生した場合に救急係に応急手当の指示を出し、研修指導員と相談して登山継続か下山するかを判断します。下山する場合は本部係とグループ責任者に指示を出すなど傷病者対応をします。また、天候の急変その他の事情が発生した場合は研修指導員と相談して、

	途中下山の判断と指示を出します。 【下山後】 ・グループ責任者は参加者の人数と体調の確認をします。 ・グループ責任者は貸出物品を事務室に返却します。 ・団体責任者は事務室で研修指導員と振り返りを行います。
その他 留意事項	・研修指導員の都合によりご希望の人数が手配できない場合があります。 ・参加者は植物や樹木などを採集せずに、ごみは持ち帰ってください。 ・参加者は森の中など虫が出る所が多くありますので、虫に刺されない対策（虫よけスプレー、長袖長ズボン）をしてください。

V 実践活動・活用事例

1. 教育事業「アクティブ・ジオキャンプ（以下ジオキャンプと表記）」での登山

（1）令和4年度

7月31日（土）、ジオキャンプ8日目に磐梯山登山②猪苗代スキー場～八方台登山口コースを実施した。人数は研修指導員1名、交流の家職員4名、ボランティア8名、キャンプ参加者19名（小学生14名、中学生5名）の計32名だった。

当日は8:30に猪苗代スキー場でリフト乗車開始、9:20に登山開始、12:20に磐梯山山頂到着、14:50に八方台登山口到着した。登山の所要時間は約6時間20分だった。

（2）令和5年度

7月30日（日）、ジオキャンプ8日目に磐梯山登山③猪苗代スキー場往復コースを実施した。人数は研修指導員1名、交流の家職員2名、ボランティア11名、キャンプ参加者18名（小学生10名、中学生8名）の計32名だった。

計画段階では令和4年度と同じ磐梯山登山②猪苗代スキー場～八方台登山口コースを実施予定だったが、ジオキャンプ参加者の体調と翌日の天気予報（最高気温35℃前後の予報）について研修指導員と相談し、体力の消耗と登山時間を短縮できる磐梯山登山③猪苗代スキー場往復コースを実施することとした。

当日は9:30に猪苗代スキー場でリフト乗車開始、9:58に登山開始、11:10に磐梯山二合目到着、14:16に猪苗代スキー場でリフト降車完了した。登山の所要時間は約4時間46分だった。

この時、時間に余裕があったため、磐梯山二合目到着後に眺めの良い沼の平というポイントまで進んだ。沼の平に寄ることで約1時間20分余計に時間がかかるため、沼の平に寄らなければ12:56頃には猪苗代スキー場でリフト降車完了になると思われる。その際の登山の想定所要時間は約3時間26分である。

（3）令和6年度

8月20日（火）、ジオキャンプ6日目に磐梯山登山③猪苗代スキー場往復コースを実施した。人数は研修指導員1名、交流の家職員3名、ボランティア7名、キャンプ参加者14名（小学生10名、中学生4名）の計25名だった。

この時期のジオキャンプ参加者の体調や高い気温を考慮し、また令和5年度に実施した磐梯山登山③コースでの参加者の反応が良かったことから、計画段階から磐梯山登山③コースを実施することとした。

当日は9:10に猪苗代スキー場でリフト乗車開始、9:54に登山開始、11:15に磐梯山二合目到着、14:25に猪苗代スキー場でリフト降車完了した。登山の所要時間は約5時間15分だった。

この時も時間に余裕があったため、沼の平というポイントまで進んだ。沼の平に寄らなければ13:05頃には猪苗代スキー場でリフト降車完了になると思われる。その際の登山の想定所要時間は約3時間55分である。

2. 教育事業「磐梯地域探究プログラム」での登山

福島県立猪苗代高等学校では、探究の時間に防災・減災についての学習を行っており、その一環で磐梯山登山を行っている。

令和4年度は磐梯山登山①八方台登山口往復コース、令和5年度は磐梯山登山①八方台登山口往復コースと裏磐梯登山口～八方台登山口コースに分かれて実施した。令和6年度は「磐梯山の他の表情も見せたい。」という高校教員の願いがあったため、交流の家職員が磐梯山登山②猪苗代スキー場～八方台登山口コースを提案した。人数は研修指導員3名、交流の家職員2名、高校生50名、教員8名、保護者5名、自衛隊員4名の計72名だった。

当日は8:50に猪苗代スキー場でリフト乗車開始、9:35に登山開始、12:40に磐梯山山頂到着、14:50に八方台登山口到着した。登山の所要時間は約6時間だった。

VI 効果

1. 令和4年度ジオキャンプ

(1) 登山についてのアンケート

アンケートは、「4：とても楽しかった」「3：まあまあ楽しかった」「2：あまり楽しなかった」「1：ぜんぜん楽しなかった」の4段階を選択する方式で実施した。

アンケートの結果、平均点は3.78点であった。

(2) 参加者の声

- ①リフトに乗って下を見たらとても高くて驚いた。涼しい風が気持ちよかった。
- ②リフトを使って登る登山は初めてだったので楽しかった。足が浮いて前に進むのも楽しかった。
- ③登山の日はとても暑かったけれど、リフトに乗っている時と山頂は涼しくて気持ちが良かった。
- ④リフトから見える景色が良くて気持ちが良かった。
- ⑤冬にしかリフトに乗ったことがなくて、どんな景色が見えるか楽しみにしていた。
- ⑥リフトに乗って周りを見ると、猪苗代湖がよく見えてすてきだった。
- ⑦猪苗代スキー場から登ったことがなかったので、見たことのない景色ばかりでおもしろかった。

2. 令和5年度ジオキャンプ

(1) 登山についてのアンケート

アンケートは令和4年度と同様の方法で実施した。アンケートの結果、平均点は3.83点であった。

(2) 参加者の声

- ①リフトからの景色がとてもきれいだった。
- ②リフトを使ったので、思っていたよりも登山が辛くなかった。
- ③リフトのおかげでばてなかった。
- ④赤埴山に初めて登った。磐梯山も良かったけど赤埴山も楽しかった。

3. 令和6年度ジオキャンプ

(1) 登山についてのアンケート

アンケートは令和4年度と同様の方法で実施した。アンケートの結果、平均点は3.86点であった。

（２）参加者の声

- ①スキー場についたらリフトに乗って帰りにもリフトに乗れたので、あまり疲れなかった。
- ②下りのリフトから見た猪苗代湖がきらきらしていてきれいだった。
- ③山頂まで登れるか不安だったけど、リフトのおかげで山頂まで登って帰ってくることができた。
- ④リフトからの眺めが絶景だった。
- ⑤赤埴山頂から見た磐梯山はいつも見ている磐梯山と見え方がちがって、きれいで感動した。
- ⑥登るときは疲れたけど、帰りのリフトできれいな景色を見て、疲れが吹き飛んだ。
- ⑦下りのリフトから猪苗代湖を見て、猪苗代湖が「天鏡湖」と言われるのがよくわかった。
- ⑧下りのリフトに乗るのは初めてだったので、とても気持ちが良かった。

４．磐梯地域探求プログラム

（１）登山についてのアンケート

未実施

（２）参加者の声

- ①スキー場の斜面を登ったので、さえぎるものがなく、猪苗代湖や猪苗代の町並みがとてもよく見えた。
- ②比較的ゆるやかな道だったので登りやすかった。
- ③普段は見られない方向から磐梯山を見ることができた。山体崩壊の様子がイメージできた。
- ④途中いくつか見晴らしの良い地点があったので、気分転換にもなった。
- ⑤植生のちがいが見られておもしろかった。
- ⑥森林限界の境界がよくわかった。

５．令和６年の磐梯山登山プログラムの実施回数と利用者数

表３ 令和６年の磐梯山登山プログラムの実施回数と利用者数

年度	実施回数（回）	利用者数（人）
令和６年	10	275

令和５年度と比べて、令和６年度の磐梯山登山実施回数は６回減、利用者数は２１２名減となった。また、登山コースを増やしたが、実施回数や利用者数の増加につながらなかった。

今回開発したコースは従来の登山コースと比べると途中の景色や眺望がすばらしかったり、急な道が少なく、登りやすかったりするという利点も多くある。そのよさについて施設利用団体へ伝えるとともに、連携している業者（リフト利用）とは料金等について相談しながら、施設利用団体が児童生徒の実態や団体の活動計画に応じてコースを選択しやすくなるように、さらなる普及・啓発に努め、コース選択者の運動習慣のきっかけづくりの一助となるようにしたい。

VII 有識者のコメント

猪苗代山岳会会長/国有林野保護監視員/福島県自然保護指導員/福島県山岳遭難対策協議会民間救助隊員/国立磐梯青少年交流の家研修指導員

渡部 修一 氏

交流の家利用団体で登山を活動プログラムに実施している団体が年々減少しているため、これまでの教育事業で実施した登山の経験を生かしたり、団体のニーズを考慮したりして、登山中の景観や運動量、所要時間の異なる3つの登山コースプログラムを利用者に提供し、登山実施者数を増やそうとした取り組みは評価できる。

3つのコースそれぞれに異なる魅力があるため、利用者が自分たちのねらいや実態に応じて選択できるように配慮した点が素晴らしい。

一方で、このように登山コースを増やしたものの、登山実施者数の増加につながっていないことは課題である。また、新たに提供した②コースと③コースについては現段階で交流の家主催の教育事業のみでの利用しかなく、他団体の利用がなかったことが非常に残念である。

そのため、交流の家では磐梯山登山に3つのコースを用意していることやそれぞれのコースの魅力を利用者に知ってもらうための広報を充実させる必要があると考える。②と③コースでは、リフトを利用することが利用者の金銭的な負担になっている可能性もある。リフトを運営するスキー場にリフト料金を下げてもらえるように交渉することも必要かもしれない。また、所要時間の短縮や1泊2日で利用する団体が2日目でも登山できるといった、金銭的な負担以外の価値についても、利用者に伝わるような広報の在り方も検討すると良いのではないだろうか。

さらに、③コースではリフトを利用せずに行う方法や、リフトを往路（登り）や復路（下り）一方のみ利用する方法も可能である。利用者の金銭的な負担を減少することができるように、今後は「リフトを利用する③コース」、「往路または復路どちらかだけリフトを利用する③コース」、「リフトを利用しない③コース」といったように、③コースのバリエーションを増やして利用者に提案してみてもどうかと考える。

引用文献・参考文献・注

- 1) 国土交通省国土地理院「国土地理院ウェブサイト」国土交通省国土地理院、<https://maps.gsi.go.jp/#11/37.567168/140.166321/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>、2025/1/28 参照

I. 趣旨

1. 背景

SDGs（持続可能な開発目標）は、2015年の国連サミットで採択された、2030年までに持続可能でより良い世界を目指すための国際目標である。このSDGsの達成に向けた取組は、我が国でも国や企業をはじめ、多方面で広く取り入れられている。特に、教育界ではESD（持続可能な開発のための教育）・環境教育の重要性が注目されており¹⁾、当所が所在する静岡県と御殿場市の教育振興基本計画²⁾³⁾においても、環境教育の必要性がうたわれている。

こうした状況を鑑みて、当所では、SDGsの認知を高めること、並びにその達成に向けた教育に取り組むことは国立の青少年教育施設としての使命であり、社会に対して大きな貢献になると考えた。また、SDGsという国際目標を当所の教育活動に取り入れることにより、当所の考えや思いを多くの利用者と共有しやすくなると考え、SDGsの積極的な推進に取り組むこととした。

そこで当所では、利用団体へ提供する新規の活動プログラムとして「SDGs ミッションウォークラリー」（以下、「本活動プログラム」という。）を開発することとした。

2. 本活動プログラムの概要・ねらい

- ①所内に設置された17か所のポイントを団体が設定する制限時間内にできるだけ多く回り、SDGsの目標について知ることを目指す。
- ②ポイントによっては、「ミッション」が設けられており、SDGsや世界で起きている状況を体験的に学ぶことができる。
- ③本活動プログラムは、所内オリエンテーリングなどの既存の活動プログラムの教育効果を基に、SDGsの要素を取り入れた内容となっている。

II. 指導のポイント

- ①各団体で事前事後にSDGsについて学習することにより、本活動プログラムを学習過程の一つとして位置付ける。
- ②各団体の目的に応じて、活動後に振り返りの機会を設ける。

この二点を団体代表者に示し、より効果的な活動プログラムとなるように支援する。

一方、本活動プログラムを取り入れる目的は団体によって異なる。例えば、「施設利用の最初に所内の状況、施設の配置を知りたい」「班の協力性を高めたい」「SDGsについて知りたい」など様々である。そのため、活動前に本活動プログラムを実施する目的について団体内で共有し、活動後はその目的を踏まえて振り返ることが望ましい。

本活動プログラムはSDGsを深く学ぶというよりも、SDGsを知るきっかけとすることを目指している。体験的な要素を取り入れていることで、楽しみながら学ぶことができ、き

っかけ作りに適したものとなっている。また、事前学習→本活動プログラム→事後学習という流れをつくることで、学びの質を高めることが期待できる。

Ⅲ.教材・教具

1. 準備するもの

(1) 個人

筆記用具、帽子、水筒、時計、必要に応じて雨具

(2) 団体

解答用紙、救急バッグ、ミッションに必要な物品（「命のメジャー」⁴⁾：公益財団法人日本ユニセフ協会ホームページより印刷可）

2. 当所が貸し出すもの

所内マップ、模範解答、バインダー、ミッションに必要な物品（目標 11「ごみの分別をしてみよう！」）



図1 「命のメジャー」



図2 目標 11「ごみの分別をしてみよう！」に必要な物品

SDGs ミッションウォークラリー マップ



- ・地図に示された①～⑬の番号の近くにポイントがあります。
- ・なぜその場所(施設)に、その番号のポイントがあるのか考えてみましょう。
- ・グループでまとまって行動しましょう。

2024.4.1

図3 所内マップ

SDGsミッションウォークラリー かいとう ようし 解答用紙				
ミッション! 1 ミッションの結果 _____ cm	2	ミッション! 3 ミッションの結果 できた/できなかった _____	ミッション! 4 ミッションの答え _____	クイズの答え 5
ミッション! 6 ミッションの答え _____	7	8	9	10
ミッション! 11 ミッションの結果 できた/できなかった _____	12	13	14	15
16	ミッション! 17 ミッションの結果 できた/できなかった _____	★ミッションのあるポイントでは、ミッションに挑戦しよう! その結果も記録しておこう! 行動宣言(これから自分ができそうなことを書いてみよう。) _____		

作成: 2024年7月

図4 解答用紙

SDGs ミッションウォークラリー

1

貧困をなくそう



どんなことを目指すの?

お金がなくて、ご飯を食べることができなかったり、住む家がなかったり、生活することが大変な人がいます。みんなが安心して暮らせるようにしようという目標です。

SDGs目標1

世界や日本の現状は?

世界には「極度の貧困状態」といわれている人たちがたくさんいます。1日どのくらいのお金で生活しなければいけないのでしょうか。

A: ノート1冊(200円)
B: スニーカー1足(4000円)
C: ゲームソフト1つ(6000円)
参考: ユニセフ

ミッションに挑戦!

命のメジャーでうで(力こぶ)の周りを測ってみよう!

図5 パネル(ミッション1)

SDGs ミッションウォークラリー

2

飢餓をゼロに



どんなことを目指すの?

ご飯を食べることができず、栄養が足りなくなり、病気になる人がいます。みんながご飯を食べられるようになって、健康な生活ができるようにしようという目標です。

SDGs目標2

世界や日本の現状は?

世界では、どのくらいの人々が食べ物を口にしていないのでしょうか。

A: 11人に1人
B: 55人に1人
C: 110人に1人
参考: 国際連合食糧農業機関(FAO)「世界の食料安全保障と栄養の現状(2023年報告)」

図6 パネル(ミッション2)

SDGs ミッションウォークラリー

3

すべての人に健康と福祉を



どんなことを目指すの?

病気になっても、病院に行けない人や交通事故で命を失ってしまう人がいます。みんなが病気で苦しむことがなくなり、交通事故にあわないようにしようという目標です。

SDGs目標3

世界や日本の現状は?

世界では、5歳以下の誕生日をむかえることなく、なくなる子どもは年間500万人います。どれくらいに一人の子供がなくなっているのでしょうか。

A: 6秒
B: 5時間
C: 1か月
参考: ユニセフ(2018年)

ミッションに挑戦!

グループで協力し、自然の中でストレッチや軽いエクササイズを行いましょう。

図7 パネル(ミッション3)

SDGs ミッションウォークラリー

4

質の高い教育をみんなに



どんなことを目指すの?

勉強したくても学校に行けない人や教員不足を解消することができない人がいます。みんなが勉強できる環境を作ろうという目標です。

SDGs目標4

世界や日本の現状は?

小学校に行きたくても行けない子供は、世界にどのくらいいるのでしょうか。

A: 57万人
B: 570万人
C: 6700万人
参考: ユニセフ(2021年)

ミッションに挑戦!

何て書いてあるか読めるかな? شكراً لك (アラビア語)
読めない人の気持ちが分かるかな?

図8 パネル(ミッション4)

SDGs ミッションウォークラリー

13 気候変動に 具体的な対策を



どんなことを目指すの？
 気温が高く、暑さで体調が悪くなったり、雨が降らなくて食糧が育たなかったりしたら、どうなるでしょうか。わたしたちだけではなく、地球で暮らす動物も花も虫も、みんなが住み続けられる地球を残そうという目標です。
出典：環境省「SDGs 図鑑」

世界や日本の現状は？
 人間の生活の影響によって、生き残れない可能性のある生き物は、地球上に何種類いるのでしょうか。
 A: 約10万種
 B: 約100万種
 C: 約1000万種
参考：国際連合環境センター（2019年）

図 17 パネル（ミッション 13）

SDGs ミッションウォークラリー

14 海の豊かさを 守ろう



どんなことを目指すの？
 海にはたくさんの魚や動物、海藻などが暮らしています。海の生き物を守るため、よごした水を海に流したり、ゴミを海に捨てたりしないようにして、海を大切にしようという目標です。
出典：環境省「SDGs 図鑑」

世界や日本の現状は？
 わたしたちがふだん使っているペットボトルや紙コップなどのプラスチックゴミの総量は年間どれくらい減っているのでしょうか。
 A: 8万トン
 B: 80万トン
 C: 800万トン
参考：国際連合環境センター（2018年）

図 18 パネル（ミッション 14）

SDGs ミッションウォークラリー

15 陸の豊かさも 守ろう



どんなことを目指すの？
 地上にもたくさんの動物や木、草が暮らしています。木や草は動物たちの家にもなります。地上の生き物を守るために、木を切りすぎないようにしたり、小さな木を植えたりして大切に守っていくという目標です。
出典：環境省「SDGs 図鑑」

世界や日本の現状は？
 現在、地上にいる両生類のうち何%が絶滅の危機にさらされているのでしょうか。
 A: 30%
 B: 50%
 C: 80%
参考：国際自然保護連合（IUCN）

図 19 パネル（ミッション 15）

SDGs ミッションウォークラリー

16 平和と公正を すべての人に



どんなことを目指すの？
 世界では、今も戦争をしている国もあり、怖いことをしてしまう人もいます。戦争や暴力、犯罪などをなくして、みんなが安心して暮らすために、平和な世界を作っていくという目標です。
出典：環境省「SDGs 図鑑」

世界や日本の現状は？
 紛争などが原因で住む場所を辞めた、世界では何らかの1人が経験するから移動しなければならない状況にあります。移動しなければならないのは何人に1人でしょうか。
 A: 2人に1人
 B: 120人に1人
 C: 300人に1人
参考：国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）（2019年）

図 20 パネル（ミッション 16）

SDGs ミッションウォークラリー

17 パートナースHIPで 目標を達成しよう



どんなことを目指すの？
 一人では世界の目標を達成することは難しいです。でも、みんなのための目標だから、みんなで仲良く、目標に向かってがんばろうという目標です。
出典：環境省「SDGs 図鑑」

世界や日本の現状は？
 SDGsの目標を達成するために必要なのは次のうちどれでしょうか。
 A: 誰か国の力
 B: 何もしなくても達成する
 C: 世界中のすべての人が協力する

ミッションに挑戦！
 次にどのゴールへ行くか、「みんな」で相談して決めよう！

図 21 パネル（ミッション 17）



図 22 所内に設置しているパネル

IV.活動プログラム（アクティビティマニュアル）

1.活動計画（内容）

活動内容 (手順)	時 間	項 目	内 容	備 考
	事前	グループ 編成とミ ーティン グ (当所、 学校 など)	☐ グループ編成を行う。 ☐ SDGsについて学ぶ。 ☐ 目的や活動方法に応じたグループ ミーティングを行う。 例・制限時間内にどう回るかを話し 合う。 ・グループの約束や目標を決め る。	バインダー などの貸出 しを希望す る場合は、 事前に班数 を当所に報 告する。
	15分	活 動 方 法 の 説 明 と 安全指導	☐ 解答用紙を配付する。 ☐ 活動の方法を説明する。 ☐ 安全に関する注意を行う。 ☐ グループごとにスタートする順番 を決める。 ☐ 軽くウォーミングアップを行う。	※指導は 団 体 責 任 者 (引率者) が 行う。
	60～90 分	活動	☐ （事前ミーティングを行わない場 合）回る順序などを話し合う。	
	15～30 分	集合 片付け 振り返り (当所、 学校 など)	☐ グループメンバー全員の人数や体 調などを確認する。 ☐ 団体責任者（引率者）に解答を伝 える。 ☐ 学んだことや気付いたことをグル ープで共有する。 ☐ SDGsの目標達成に向けて、「行動 宣言」を考える。 例・「食べ残しをしない！」 ☐ 貸出物品を返却する。	振り返りは 他 の 活 動 を 踏まえて、別 の 活 動 プ ロ グ ラ ム と し て 事 後 に 実 施 す る こ と も 可 能。

想定されるリスク	☐ 転倒、木の枝との接触によるけが ☐ 所内を通行する車両との衝突 ☐ 他団体の活動への支障
----------	---

V. 実践活動・活用事例

1. 実施団体からのアンケート結果（実施団体数 25 団体）

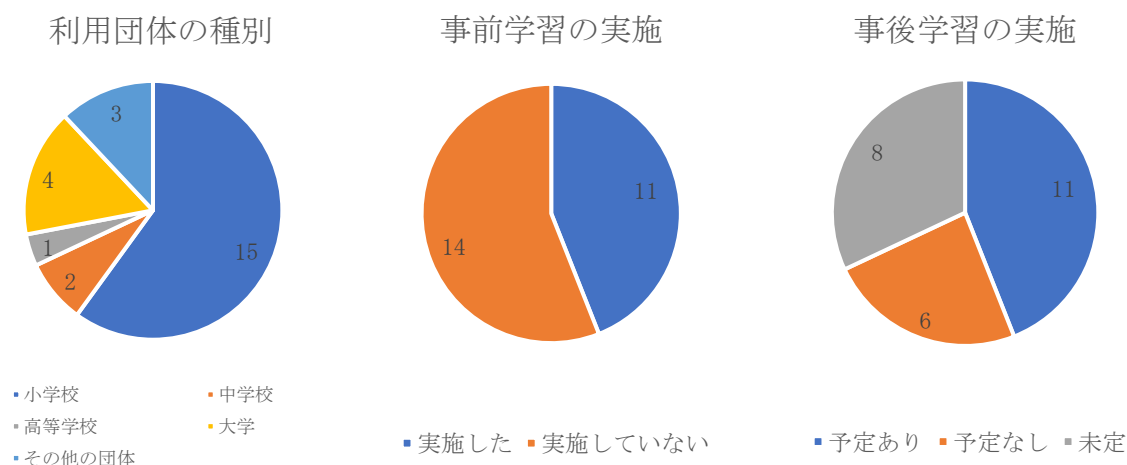


図 23 実施団体からのアンケート結果

実施団体の種別としては、小学校が多くを占めていた。また、その他の団体の中でも小中学生が含まれるガールスカウトや県・市町の教育委員会主催事業などの団体が多く、小学生から中学生が主な利用者となっており、当所が意図するターゲット（小学生～中学生）に実施されていた。

実施団体の傾向としては、当所で本活動プログラムを実施する前に SDGs に関する事前学習を行っていない団体の方が多かった。本活動プログラムは、SDGs を知るきっかけになれば良いと考えてはいるが、事前事後の学習を行うことで SDGs についての学びを深めることにつながるため、この「学びの深まり」の大切さを団体へ積極的に伝え、より効果的な運用に努める必要がある。また、事前学習をどのように行ったかについては、『『総合的な学習の時間』などを活用し、調べ学習を行った』という団体が多かった。

2. 活用事例

- ①静岡県御殿場市や小山町の小学校では、各自が興味を持った SDGs の目標を選び、図書室の本やタブレットを使って調べた後、プレゼンテーション資料を作って発表し合い、内容を共有した。
- ②東京都内の私立大学では、「御殿場市内で実施されている SDGs の取組」や「御殿場市を拠点とする公共施設や企業の SDGs の取組」について調べた。
- ③御殿場市の小学校では、当所のパネルに記載されたミッションではなく、子供たちが考えたオリジナルのミッションに変更して実施した。

④静岡県内のガールスカウトでは、事前に「SDGs 人生ゲーム」(市販のもの)⁵⁾を活用したが、普段の活動の中でSDGsにつながるような話をし、意識を高めていた。事後に目標14(海の豊かさを守ろう)に関連付けて、オリジナルの魚釣りゲームを制作・活用し、プラスチックや海洋ごみが海の生物に与える影響を考えるきっかけにしたり、目標11(住み続けられるまちづくりを)に関連付けて、イラストの描かれたカードを「燃えるごみ」「燃えないごみ」「リサイクル物」に仕分けするごみ分別ゲームを行ったりした。また、これらを当所の施設開放事業「オープンハウス」にて来場者にも提供した。



図24 ミッション1(「命のメジャー」で腕の周りを測ってみよう)に取り組む様子
参加者同士が協力して取り組んだ。メジャーの使い方やその意味することについて、助言が必要そうな様子が見られた。



図25 本活動プログラムを開発していく段階で、主催事業として実施した体験会の様子
ガールスカウトの指導者や地元の小学校教員にも参加いただき、本活動プログラムの改善を図った。

VI. 効果

本活動プログラムの効果としては、次の三点を挙げる事ができる。以下に参加者の反応や変容(指導者の感想など)を示す。

1. 効果 1

グループで意見交換しながら回る順序を決定し、ポイントを探しながら「クイズ」「ミッション」に取り組むことで、コミュニケーション能力や協調性を養うことができる。

(1) 指導者等

- ①班の友達と協力して問題に取り組む姿が見られた。(小学校)
- ②グループで活動したため、協力するということについても意識が高まった。(小学校)
- ③内容の難しいところもあったが、多くが三択だったので、友達と協力しながら答えていた。(小学校)
- ④子供たちは学校で学んだ知識や自分が知っていることなどのアイデアを出し合いながら解答していた。(小学校)

2. 効果 2

できるだけ多くのポイントを回ることを目標にすることで、本活動プログラムへの積極的な参加を促しながら、SDGs の目標について学ぶことができる。

(1) 指導者等

- ①すぐに取り組める内容はさっそく取り組もうとする様子が見られた。(小学校)
- ②環境や自然、企業の取組などに興味を持つ子が見られた。図書室に SDGs コーナーを設置して図書を置いたところ、立ち止まる子が出てきた。(中学校)
- ③多くの児童が SDGs の言葉は知っていたが、具体的なことはあまり理解していなかった。ので、具体的なことを知る良い機会となった。(小学校)
- ④子供の予想に反した答えがあり、ゴール後に「初めて知った」という驚きの声を聞くことができた。(小学校)
- ⑤解説文の、貧困の中で暮らしている人口やごみの出る量などに驚きや関心を示しながら実施していた。(小学校)
- ⑥小学生にも分かりやすい解説である。(小学校)

(2) 参加者

- ①世界の実態を知ることができて良かった、学びが多かった。(小学校)
- ②今後の生活に生かしていきたい。(小学校)
- ③自分にできること、小さいことから努力することが大切である。(小学校)
- ④答えに悩んだ問題もあったため、自身が思っているよりも世界情勢や社会課題について大学生としてより関心を寄せなければいけないと感じた。(大学)
- ⑤持続可能な社会を目指す上で色々な課題があることはなんとなく知っていたが、詳しい数字としてのデータなどはそこまで理解がなかったので、SDGs について考える良い機会になった。(大学)
- ⑥前学年で総合的な学習の時間に SDGs について学習し、その学習した内容があったため、分かる問題もあった。(小学校)

3. 効果 3

事後学習（振り返り）の中で、自分に何ができるのか（行動宣言）を考えることで、SDGs

をより自分事として捉えることができ、社会への関心や自らの行動力を高めることができる。

(1) 指導者等

- ①事前学習を実施したこともあり、SDGs に対する意識が高まっている。残食をなくすことや節電などを心掛ける児童が増えている。(小学校)
- ②世界には自分たちと違い、困っている人がいることに気づいたため、給食の残食を減らそうと呼び掛けたり、ごみを拾おうとしたりする児童がいた。(小学校)
- ③「水道から水が飲める国はわずかである」、「学校に通うことができない子どもがいる」など、普段の自分たちの生活を振り返ることができた。また、「日常のニュースを気に掛けよう」と言う子もいた。(小学校)
- ④夕食、朝食の時間に、ご飯を無駄にしないことを意識していた。(小学校)

(2) 参加者

- ①問題を解いたり体験したりして、世界にはこんな人もたくさんいるなあと思い、私もごみを減らすことや募金をするを頑張ろうと思った。(小学校)

VII. 有識者のコメント

静岡大学地域創造教育センター長・教授（現静岡大学地域創造教育センター特任教授）阿部耕也氏の協力を得て本活動プログラムを試行実施し、開発を進めてきた。協議の中で出た指導内容については以下のとおりである。

- ①その場限りのものではなく、学校や普段の生活でも思い出せるものにしたい。
- ②地域のクイズを入れてみてはどうか。
- ③SDGs は小学生でも十分に担い手になり得る（自分事として考えられる）。
- ④広い敷地を利用できるという強みはあるが、時間がかかってしまう。
- ⑤半日のプログラムなので、SDGs を深く学ぶというよりは、きっかけとして意識付ける。
- ⑥いかに持続可能なプログラムとしていくか。

VIII. その他

有識者のコメント、本活動プログラムの実施の様子、及び指導者等・参加者の振り返りを受けて、今後の課題としては以下のような点が挙げられる。

- ①世界の情勢を踏まえ、各年度で情報を更新する必要がある。
- ②事後解説を読むのに時間がかかる。
- ③知識があるかないかに依存したものではなく、計算をしたり少し捻って考えたら答えが分かるような問いの出し方にしたりするともっと参加しやすい。
- ④問題に出てくる数字が実感のわかないものになっている。→世界の人口などは、母数が大きいので、クラス単位に置き換えて問題を作るなど、身近に感じられる数の方が想像しやすい。
- ⑤SDGs 達成に向けた取組や世界の現状を、いかに自分事として捉えられるような内容にできるかを工夫する必要がある。
- ⑥対象者になるべく身近に考えやすい内容で、さらに体験的要素を含めたものとなるように工夫する。

- ⑦小学生が簡単と捉える一方、大学生が難しいと捉えているというアンケートの回答があるなど、問題の難易度の感じ方に差異が見られる。
- ⑧地域課題と関連させた問題を作るなど、自分が住んでいる地域の実情を知ったり地域課題にどう取り組むかを考えたりする機会につながるようにしたい。
- ⑨自分たちのねらいに沿った活動プログラムになるようにアレンジを加えていくことが今後、本活動プログラムのブラッシュアップにつながる。

引用文献・参考文献・注

- 1) 文部科学省「持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development)」文部科学省、<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>、2025/2/13 参照
- 2) 静岡県・静岡県教育委員会「静岡県教育振興基本計画 2022→2025」静岡県、<https://www.pref.shizuoka.jp/kodomokyoiku/kyoiku/sougoukyoiku/1051282/index.html>、2025/2/13 参照
- 3) 御殿場市教育委員会「第2期御殿場市教育振興基本計画 令和3年度～令和7年度」御殿場市、<https://www.city.gotemba.lg.jp/kyoiku/d-1/d-1-6/1911.html>、2025/2/13 参照
- 4) 公益財団法人日本ユニセフ協会「子どもと先生の広場」公益財団法人日本ユニセフ協会、https://www.unicef.or.jp/kodomo/osirase/2017/03_01.html、2025/2/13 参照
- 5) 金沢工業大学 SDGs 推進センター「Beyond SDGs 人生ゲーム」金沢工業大学、<https://www.kanazawa-it.ac.jp/sdgs/jinsei/j-games/>、2025/2/13 参照
- 6) 公益財団法人日本ユニセフ協会「持続可能な世界への第一歩 SDGsCLUB」公益財団法人日本ユニセフ協会、<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/>、2025/2/13 参照
- 7) 国際連合食糧農業機関 (FAO) 駐日連絡事務所「世界の食料安全保障と栄養の現状」国際連合食糧農業機関 (FAO) 駐日連絡事務所、<https://www.fao.org/japan/news/detail/sofi2023-pr/jp>、2025/2/13 参照
- 8) 国土交通省「令和3年版 日本の水資源の現況」国土交通省、https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/mizukokudo_mizsei_tk2_000028.html、2025/2/13 参照
- 9) 国際労働機関「世界の雇用及び社会の見通し：動向編 2020年版」国際労働機関、<https://www.ilo.org/ja/publications/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%AE%E9%9B%87%E7%94%A8%E5%8F%8A%E3%81%B3%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E3%81%AE%E8%A6%8B%E9%80%9A%E3%81%97%EF%BC%88%E5%8B%95%E5%90%91%E7%B7%A82020%E5%B9%B4%E7%89%88%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%82%B0%E3%82%BC%E3%82%AF%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%96%E3%82%B5%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%BC>、2025/2/13 参照
- 10) 国際電気通信連合「情報社会の測定レポート 2018」国際電気通信連合、<https://www.itu.int/en/ITU-D/Statistics/pages/publications/misr2018.aspx>、2025/2/13 参照
- 11) デボラ・ハードゥーン「An Economy for the 99%」オックスファム・インターナショナル、<https://www.oxfam.org/en/research/economy-99>、2025/2/13 参照
- 12) 国際連合広報センター「SDGs を17の目標ごとにわかりやすく紹介したチラシ、SDGs シリーズ「なぜ大切か」【改訂版ができました】」国際連合広報センター、<https://www.un.org/ja/sdgs>

- w.unic.or.jp/news_press/info/24453/、2025/2/13 参照
- 13) 農林水産省「食品ロスの現状を知る」農林水産省、https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spel_01.html、2025/2/13 参照
 - 14) 国際連合広報センター「国連報告書が世界に「警告」：100 万種の生物が絶滅の危機に」国際連合広報センター、https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounds/33018/、2025/2/13 参照
 - 15) 国際連合広報センター「やめよう、プラスチック汚染」国際連合広報センター、https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/beat_plastic_pollution/、2025/2/13 参照
 - 16) 国際自然保護連合「46,300 種以上の生物に絶滅の危惧がある。」国際自然保護連合、<https://www.iucnredlist.org/ja>、2025/2/13 参照
 - 17) 国連 UNHCR 協会「UNHCR の難民支援」国連 UNHCR 協会、<https://www.japanforunhcr.org/appeal/trend>、2025/2/13 参照
 - 18) 静岡市「SDGs 関連資料」静岡市、<https://www.city.shizuoka.lg.jp/s2934/s009128.html>、2025/2/13 参照

障がいのある子供たちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進

国立那須甲子青少年自然の家

I. 趣旨

現代の青少年を取り巻く今日的な課題は多岐にわたり、その中でも障がいの有無に関わらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会の実現に向けての取り組みを進める必要がある。文部科学省中央教育審議会でも「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である」¹⁾と指摘されている。よってこれは、全国の青少年教育施設でも積極的に取り組むべき課題であると考えられる。

そこで、当施設では機構の定める独立行政法人国立青少年教育振興機構が達成すべき業務運営に関する計画（中期計画）²⁾における、各施設の特色化に向けた施設の運営についての教育テーマを「障がいのある子供たちが地域で共に学び、共に生きる教育の推進」とし、将来の共生社会実現へのために誰もが使いやすく、利用しやすい青少年教育施設として運営ができるように様々な取組を進めてきた。

まず、障がいのある子供たちが学びやすい環境の整備として、活動プログラムの内容や展開例の整理を行ってきた。また、施設案内動画の作成を中心に行い、ユニバーサルデザインを進めてきた。

次に、障がい等をはじめ困難を抱える者、健常者という枠を超えた「共生（インクルーシブ）」を目指し、スペシャルニーズ（さまざまな障がいや疾患、または経済的な問題や家庭の問題などにより、必要となる特別な配慮や支援のこと）³⁾を学習するためのプログラム開発を進めてきた。さらに、そこには発達障害など障がいのある子供の対応など、地域課題や学校のニーズも踏まえたプログラムとなるようにした。

これらを踏まえ、当施設では野外炊事のカレー作りの手順書の作成と活用、パラスポーツであるボッチャのプログラム化、施設紹介動画のバリアフリーバージョンの作成と公開の3点に取り組んだ。

II. 指導のポイント

野外炊事、ボッチャ、施設紹介動画活用の指導の際のポイントとして、以下の点があげられる。

1. 野外炊事におけるカレー作りの手順書

(1) 利用者への周知

野外炊事の際には、活動前に用具の使用方法や安全に関する指導を職員が実施している。その際に作り方として手順書を全利用者に紹介し、活用を促している。

(2) 子供の特性に応じた使用方法

障がいの程度や種類に応じて指導者が使用方法を変えることが可能である。手順ごとにカードのように切って、順を追ってひとつひとつ指導したり、すべての行程を示すことで見通しをもたせてから、現在の行程を磁石などで示しながら指導したり、子供の特性に応じて使用方法を変えながら指導することができる。つまり、指導者は子供の特性に応じて使用方法を選択することが必要である。

（３）事前指導での活用

完成した手順書を令和５年度よりホームページで公開している。事前説明会や打ち合わせの際に団体への周知を図っている。事前指導で活用されることで、作り方の行程を前もって学習することができる。さらに、役割分担用の資料も作成しており、それを活用することで、さらにスムーズに活動することができるようにしている。

２．ボッチャ

（１）説明資料の活用

説明資料の内容としては、ルールの説明、ボッチャの特徴、実施するねらいを示したものとした。レクリエーション活動として楽しむためにはルールの説明は必須である。そこに、ボッチャの特徴を示すことで、障がいのあるなしに関わらず誰でも簡単にできる、子供からお年寄りまで幅広い年代の人が一緒に楽しむことができるということを強調することが重要である。さらに、実施するねらいとして、ただ楽しくレクリエーションとして行うのではなく、障がいのある人へのイメージをポジティブにすることや障がいのある人への理解を深めることのきっかけとして実施することを示すことが重要である。

（２）実施方法

ゲームを実施する際には、できる限り実施者同士で関わるのが重要である。チーム内で誰が投げるのか、どこに投げるのかなどを相談で決定してゲームを進めていくようにする。また、審判もセルフジャッジを取り入れることが必要である。そのようにしてゲームを進めていくことで、自然と話し合う機会が多く生まれ、コミュニケーション能力の向上に繋がっていく。こうすることによって、お互いの違いを知ること、お互いを認め合うことのきっかけ作りの場になる。

３．バリアフリーバージョンの施設紹介動画

（１）ホームページでの公開

当施設のホームページで公開をしている。公開の仕方として、通常の施設紹介の動画とバリアフリーバージョンの動画を同一ページに並列して公開している。二つの動画を並列させることで、なぜバリアフリーバージョン動画があるのか、どこが通常の動画と違うのかという問いをもつことが第一歩であると考えられる。

そこから、様々な人が当施設を利用しているということの気付きに繋がるような指導ができると考えられる。



図１ ホームページの施設紹介動画

Ⅲ.教材・教具

野外炊事、ボッチャを実施する際の教材、教具として使用するものは、以下の通りである。

1. 使用物品

(1) 野外炊事のためのカレー作りの手順書

カレー作りをするすべての団体が利用できるよう、貸出用としてラミネート加工したものを30枚程度準備している。それを野外炊事場に常時置くことで、団体に貸し出している。また、ホームページにもアクティビティマニュアルと一緒に掲載して、利用者が印刷して、切るなどの加工もできるようにしている。さらに、役割分担用の資料も公開しており、利用者が自由に活用することができるようにしている。

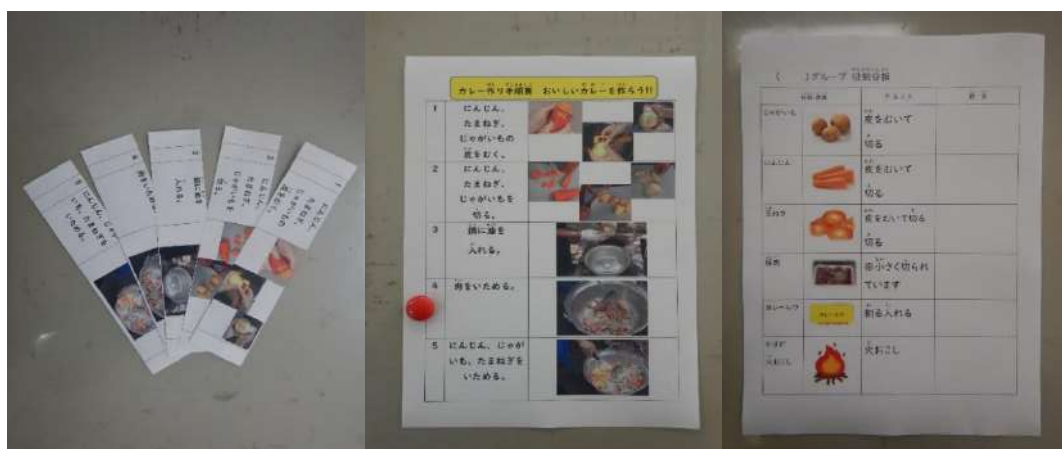


図2 手順書の活用方法と役割分担資料

(2) ボッチャ

ボッチャセットが6セットあり、1チームを6名で編成した場合、最大で一度に72人がゲームをすることができる。人数が多くなる場合、1チームを審判としてローテーションしてゲームを行うなどすればさらに多くの人数での実施が可能である。

また、ボッチャコートもハーフコート（5m×3m）が6コート分あり、布製で床に敷くことで簡単にコートが作成できるようになっている。また、ハーフコートであるため正式なゲームコートよりも小さく、利用者が初めて実施する場合でも利便性が高い。

さらに、説明資料にはルール、特徴、ねらいを記入し、紙芝居形式で団体の指導者が実施前に説明ができるようになっている。



図3 ボッチャセット

IV. 活動プログラム（アクティビティマニュアル）

プログラム化したボッチャの活動プログラムは以下の通りである。



⑬ ボッチャ（パラスポーツ）

概要	重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、ヨーロッパで生まれたパラリンピックの正式種目です。体力の優劣を問わず、年齢、性別、障がいのあるなしにかかわらず、すべての人が一緒に競い合えるスポーツです。ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競います。			
ねらい	・障がいへのイメージをよりポジティブにすることができます。 ・仲間と協力して戦略を考え、ゲームを進めることで、お互いの違いを知り、認め合うきっかけ作りになります。			
条件	対象	幼児～	人数	制限なし
	時期	通年	実施の判断	—
貸出物品 ・ 準備物	自然の家（貸出物品）		団体（準備物）	個人（準備物）
	☐ ボッチャセット ☐ コートシート ☐ 説明資料		☐ 救急セット	
引率者の役割	・ 事前のルールやねらいの確認、チーム決定。 ・ 時間と安全の管理。 ・ 終了後の片付けと清掃。 ・ 事務室への連絡。			
自然の家職員の役割	・ 教材庫より物品の貸し出し。			
活動の流れ （1～2時間）	【準備】 ・ ボッチャのルール、特徴、ねらいを資料を使って確認します。 【活動】 ・ ボッチャのルールとねらいを意識して、活動します。 【実施後】 ・ 貸出物品を教材庫前に返却します。			
安全管理 留意事項	・ 怪我防止のため、誤った投げ方をしたり、勢いよく投げたりしないことや周囲の確認をしてから投げることをご指導ください。 ・ 投げる前のボールやコート外に出たボールはまとめて1か所に置き、踏むことがないように指導してください。 ・ 審判はセルフジャッジを進めることを指導してください。 ・ 起こりうる怪我としては、爪の破損等が考えられますので、救急セットをお持ち込みください。			

V. 実践活動・活用事例

野外炊事、ボッチャ、施設紹介動画の実践事例および活用事例は、以下の通りである。

1. 野外炊事におけるカレー作りの手順書

今年度、教育事業および研修支援としてカレー作りを行うすべての団体へ事前説明の際に提示し、活用した。活用団体数は 65 団体であった。そのうち、小学校での実施が最も多く 36 団体であった。学校団体の活用においては、来所する前の事前指導がしやすいため、事前に学校で調理手順を確認してきたり、役割分担を事前に行ったりしてきている団体が多く見られた。また、児童が使用するしおりに手順書を入れ込んで活用している学校団体も見られた。

数校の特別支援学校中等部の宿泊学習においても、野外炊事を実施する際に活用していた。



図 4 手順書活用の様子

2. ボッチャ

プログラム化に向けて小学生を対象としてボッチャ体験を行った。公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会に指導を依頼して、効果の測定をした上でプログラム化に向けての検討をすることを目的に実施した。

体験は学級単位で実施し、学級の人数に差はあったが、1 学級または 2 学級で 90 分間の体験を実施した。

体験は以下の日程、人数、指導者で実施した。

- | | | | |
|-----------------|-------|-----------|-----------|
| ① 9 月 30 日 (月) | A 小学校 | 1 学級 18 人 | 協会指導員 A 氏 |
| ② 10 月 16 日 (水) | B 小学校 | 1 学級 9 人 | 協会指導員 B 氏 |
| ③ 10 月 23 日 (水) | C 小学校 | 1 学級 20 人 | 那須甲子職員 |
| ④ 10 月 23 日 (水) | D 小学校 | 1 学級 27 人 | 那須甲子職員 |
| ⑤ 10 月 30 日 (水) | E 小学校 | 1 学級 34 人 | 協会指導員 B 氏 |
| ⑥ 10 月 30 日 (水) | E 小学校 | 1 学級 34 人 | 協会指導員 B 氏 |

- ⑦10月30日（水） F 小学校 1 学級 13 人 協会指導員 B 氏
 ⑧11月12日（火） G 小学校 2 学級 49 人 協会指導員 C 氏、協会指導員 D 氏
 ⑨11月12日（火） G 小学校 1 学級 25 人 協会指導員 C 氏、協会指導員 D 氏
 ⑩11月12日（火） H 小学校 1 学級 34 人 協会指導員 C 氏、協会指導員 D 氏



図5 ボッチャ体験の様子

3. バリアフリーバージョンの施設紹介動画

動画を公開して以来、通常の施設紹介動画は週 100 回程度のペースで視聴されている。バリアフリーバージョンも週 50 回程度のペースで視聴されているため、両動画を比較して見ている人や団体も一定数いるのではないかと推察される。

また、YouTube でも公開しており、当施設のホームページを閲覧した人だけでなく、幅広く公開することで、より多くの人の目に触れていると推察される。

VI. 効果

野外炊事におけるカレーの手順書、ボッチャ、施設紹介動画公開の効果は以下の通りである。

1. 野外炊事におけるカレーの手順書

（1）研修支援団体での効果

活用の仕方としては、手順を最後まで示した形で行程を見通せるように活用しているケースが最も多かった。事前指導として役割分担して、しおりに入れ込み、活動する際に完成までの見通しをもち、スムーズに活動できるように配慮している様子が見られた。その結果、カレー作りでの失敗はあまり見られることがなかった。指導者からも「手順書があることで事前指導や活動がスムーズに行えた」という意見を多く聞くことができた。

（2）特別支援学校での効果

特別支援学校での活用では、生徒ひとりひとりの特性に応じて活用されている様子が見られた。磁石を使い、現在行っている手順を示し、視覚的に理解しやすくして活用していた。それによって、生徒が迷うことなく、自分の手順をしっかりと理解して、最後までカレー作りを行うことができていた。

さらに、カレーの手順書をベースとして、当施設の野外炊事で実施できるやきそば作り

の手順書も学校独自に作成していた例も見られた。実際に来所して、やきそば作りを実施したが、カレー同様に生徒たちはスムーズに調理をすることができていた。

(3) その他の効果

ホームページでの公開していることにより、他施設より利用したいとの依頼もあった。ホームページを見た関東地方の社会教育施設より連絡をいただき、体験活動推進協議会のモデル事業として、特別支援学校の受入れを行っているとのことであった。そこで、当施設の手順書を活用したいとの申し出があり、活用していただいている。

2. ボッチャ

(1) 効果測定の方法

ボッチャ体験を行うことを通して、障がいに対するイメージがどのように変化するか、また、障がいの有無にかかわらず、全員がともに活動できるための意識や行動がどのように変化するかを測定することを目的とした。

(2) 方法

i 対象と手続き

国立那須甲子青少年自然の家で集団宿泊的行事を実施した、東北地方の I 村の小学校 4 校、J 町の小学校 3 校、関東地方の K 町の小学校 1 校の 5・6 年生 265 名を対象に、質問紙調査を行った。質問紙調査は、ボッチャ体験の実施直前と実施直後の 2 回実施した。調査に先立ち、調査実施者から文書及び口頭で説明を行い、本調査への協力を依頼した。その結果、263 名（5 年生 237 名、6 年生 26 名）より回答を得た。

ii 質問紙

障がいや障がい者スポーツに対する意識を測定するため、齊藤ら(2021)⁴⁾の開発したアダプテッド・センシティブ尺度を用いた。この尺度は、障がいイメージ、障がい者スポーツのイメージ、アダプテッドの主体的意識、アダプテッドの実践場面への適用の 4 項目で構成されているものである。回答は強制選択方式とし、設問ごとの選択項目から 3 項目を選択するように求めた。項目と選択肢を表 1 に示す。

表 1 使用した項目と選択肢

項目	選択肢		
障がいイメージ	困っている	個性的	手伝いが必要
	不便なことがある	その人らしさ	リハビリ
	自由に動けない	できることがある	車いす
障がい者スポーツイメージ	楽しそう	大変そう	チャレンジしてみたい
	不便	激しい	障がい者のためのもの
アダプテッドの主体的意識	障がい者スポーツに詳しい先生や指導者		スポーツのルールを変えること
	障がい者スポーツの本や資料		障がいのある友だちと相談すること
	障がい者スポーツ専用の道具や場所		サポートすること
アダプテッドの実践場面への適用	友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう		
	友だちも楽しめるようにルールをかえる		
	あまりボールを渡さないようにしてあげる		
	みんなが車いすののって車いすバスケットをする		
	無理をさせず、得点係や応援でがんばってもらう		
	ボールを使いやすいものにかえる		

(3) 結果

分析の前に、各設問において4つ以上選択している者や、2つ以下しか選択していない者の回答を除外した。その結果、222名を分析対象とした。

分析にあたって、回答を以下のように得点化した。障がいイメージ及び障がい者スポーツイメージの項目では、ポジティブイメージを示す選択肢が3つ含まれていたため、その選択肢を回答した数を得点とした。理論的には、得点は0～3点に分布し、得点が高いほど障がいイメージへのポジティブ傾向や障がい者スポーツイメージへのポジティブ傾向が高いことを示す。アダプテッドの主体的意識の項目では、自らがアダプテッドを行う選択肢3つ含まれていたため、その選択肢を回答した数を得点とした。理論的には、得点は0～3点に分布し、得点が高いほどアダプテッドの主体的意識が高いことを示す。アダプテッドの実践場面への適応の項目では、具体的場面でアダプテッドの内容を含む行動を示す選択肢が3つ含まれていたため、その選択肢を回答した数を得点とした。理論的には、得点は0～3点に分布し、得点が高いほどアダプテッドの実践場面への適応の程度が高いことを示す。

項目ごとに、ボッチャ体験の前後で有意な変容が見られるかを確認するため、ウィルコクソンの符号付き順位検定を行った。結果を表2に示す。障がいイメージへのポジティブ傾向及び、障がい者スポーツイメージへのポジティブ傾向は体験前から体験後にかけて有意に高くなっていた（障がいイメージへのポジティブ傾向： $Z=-7.83$, $p<.001$, $r=-0.71$ ；障がい者スポーツイメージへのポジティブ傾向： $Z=5.96$, $p<.001$, $r=-0.58$ ）。一方、アダプテッドの主体的意識及びアダプテッドの実践場面の適応に関しては、体験の前後で有意な違いは認められなかった。

表2 ウィルコクソンの符号付き順位検定の結果

項目	体験前		体験後		Wilcoxon rank sum test	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Z</i>	<i>r</i>
障がいイメージへのポジティブ傾向	0.63	0.82	1.47	1.08	-7.83***	-0.71
障がい者スポーツイメージへのポジティブ傾向	1.21	0.80	1.71	0.72	-5.96***	-0.58
アダプテッドの主体的意識	1.49	0.68	1.48	0.72	0.10	
アダプテッドの実践場面への適用	2.26	0.73	2.35	0.69	-1.28	

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(4) まとめ

本効果測定では、ボッチャ体験を行うことで、障がいに対するイメージや、障がいの有無にかかわらずともに活動できるための意識や行動がどのように変化するかを検討した。

その結果、ボッチャ体験を通して、障がいに対するイメージや障がい者スポーツに対するイメージがポジティブに変容することが示唆された。活動プログラムとして提案したとおり、障がいのある者がボッチャを行っている様子や、なぜボッチャ体験を行うのかといったねらいを参加者に説明してからボッチャ体験を行うことで、既存の「障がい」「障がい者スポーツ」へのネガティブなイメージが軽減され、ポジティブなイメージをもつことができると考えられる。一方で、アダプテッドの主体的意識やアダプテッドの実践場面への適用は有意な変化が認められなかった。90分程度の比較的短い時間であること、通常学級

での実施でありアダプテッドの概念にあたる行動が求められる場面が少ないことが、変容が認められなかった理由であると推察される。

なお、本報告ではレクリエーションとして行うボッチャ体験の効果は測定していない。よって、実施の際は当施設の提案する教材等を用い、ねらいを明確にして実施することに留意する必要がある。

3. バリアフリーバージョンの施設紹介動画

両動画を並列して公開していることで、両動画ともに再生回数は延びている。比較して見ている人や団体も一定数いるのではないかと推察されるため、両動画の違いから、施設としてもバリアフリー設備が充実していることや、障がいの有無に関わらず利用可能であるということが周知されていると推察される。

VII. 有識者のコメント

事業開始当初より福島県立西郷支援学校、東北福祉大学、基幹相談支援センターの協力を得て、年2回の企画評価委員会を開催してきた。また、ボッチャ体験では、様々な指導員に指導をいただいた上で、今後について意見をいただいた。

その中で出た意見や感想は、以下の通りである。

1. 野外炊事におけるカレー作りの手順書

- ①ユニバーサルデザインに基づいた手順書があることで、児童生徒にとって自分でやり遂げた達成感を体験することができると思う。
- ②必要な水の量が分かりにくいいため、カレー皿を目安として使用するように変更したことは、わかりやすくなって非常に良い。
- ③具材がどのようなになったら煮えているのかなど、細かな部分が分かりにくいいため、訂正や加筆していくとさらに良いものになるのではないか。
- ④カレーの手順を発端として、那須甲子のプログラムの手順書がファイリングされていると、障がいのある人たちにとって環境面、ソフト面で充実していくのではないか。

2. ボッチャ

- ①パリパラリンピックに向けて、ボッチャ日本代表チームが福島県白河市で合宿を行っていた。結果は銅メダルを獲得した。そのような点からもぜひ、那須甲子からもボッチャの魅力を発信して、普及に繋げていてもらいたい。
- ②パラスポーツ協会としては、パラスポーツの入り口としてボッチャの体験を指導している。他にもパラスポーツがたくさんあり、多くの人が障がいの有無に関わらず、パラスポーツを行っている。パラスポーツであるボッチャを知ることで、今後自らが調べたり、プレーしたりすることに繋がり、障がいのある人を理解してくれるきっかけとなればよいと考えている。
- ③プログラムとして提供する場合、ボッチャをやるねらいを明確にして、そのねらいに沿って内容を考えていかななくてはならない。指導者がねらいをもって、それを実施者にしっかりと伝えることが不可欠である。そうでない場合、ただの楽しいレクリエーション

で終わってしまうことが懸念される。

3. バリアフリーバージョンの施設紹介

- ①公開されている動画を事前学習で活用した。知的障がいのある子供などは初めての場所のイメージが持ちづらい。ホームページの写真も事前指導に活用でき、有効であると感じている。
- ②動画には字幕があり、バリアフリー施設の紹介もあるため非常にわかりやすい。
- ③字幕はあるが、そこにふりがながあるともっとよいのではないか。
- ④那須甲子では、プログラム実施の仕方の動画や布団のたたみ方など、様々な動画を作成して公開しているが、その動画もバリアフリー化してはどうか。

VIII. その他

有識者のコメント、プログラム実施の様子を受けて、今後改善していかななくてはならない部分もある。課題として、以下のような点があげられる。

1. 野外炊事におけるカレー作りの手順書

細かな部分まで記載することは可能であるが、それによって貴重な体験の機会を奪ってしまう可能性もある。失敗から学ぶことも体験活動では多々あるため、どの程度まで教授したものを活用していくかの検討が必要である。

さらに、カレー作りに限らず、どのプログラムにおいても手順書を活用できるように作成していくことも必要である。

2. ボッチャ

今後、本格的にプログラムに取り入れていくことになる。検証によりボッチャを行うことで障がいに対するイメージや障がい者に対するイメージがポジティブに変容することが分かっている。しかし、プログラムを利用者が選択して実施している現状では、より多くの利用者が実施してくれるような方策を考えていかなければならない。多くの利用者がボッチャを実施することで、効果も拡大していくと考えられる。

3. バリアフリーバージョンの施設紹介動画

現在、施設紹介の動画のみがバリアフリーバージョン化されている。他にも利用者の利便性の向上を図るために様々な動画を公開している。今後は現在公開している動画のバリアフリーバージョンを作成して公開していくことも必要である。

引用文献・参考文献・注

- 1) 中央教育審議会初等中等教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のため特別支援教育の推進（報告）」、2012、p. 4.
- 2) 国立青少年教育振興機構「独立行政法人国立青少年教育振興機構が達成すべき業務運営に関する目標（中期目標）」、2021、p. 5.
- 3) 野口和行「SNCN/Special Needs Camp Network」スペシャルニーズキャンプネットワーク

ク、<https://sn-camp-net.wixsite.com/sn-camp-net>、2025/1/30 参照

- 4) 齊藤まゆみ・澤江幸則・齊藤仁人・松原豊 「ボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識に及ぼす影響」『筑波大学体育系紀要』第 45 号、2022、p. 27-33.

^{づく} ^{てじゅんしよ}
カレー作り手順書 ^か ^れ ⁻ ^{つく}
おいしいカレーを作ろう!!

1	にんじん、 たまねぎ、 じゃがいもの ^{かわ} 皮をむく。	
2	にんじん、 たまねぎ、 じゃがいもを ^き 切る。	
3	^{なべ} ^{あぶら} 鍋に油を ^い 入れる。	
4	^{にく} 肉をいためる。	
5	にんじん、じゃが いも、たまねぎを いためる。	

6	^{みず} 水 ^い を入れる。 カレー^{ざら}皿^{はいぶん}3杯分 (1セット ^{ぶん} 分)	
7	じる。 あく ^と を取る。	
8	^{よわび} 弱火にして カレー ^か ル ^れ ウ ^ー を ^る 入れる ^う 。	
9	かきまぜる。	
10	できあがり。	

おわりに

独立行政法人国立青少年教育振興機構は、我が国における青少年教育の振興及び健全な青少年の育成をミッションとし、全国 28 の国立青少年教育施設で自然体験活動や集団宿泊活動をはじめ様々な体験活動の機会と場を全国の青少年に提供しています。

また、当機構のビジョンである「青少年一人ひとりが幸福を追求できる持続可能な社会」を実現するため、教育的な観点から「誰一人取り残すことなく、全ての子供たちに良質な体験を提供すること」を役職員一丸となって目指しています。

さて、各国立青少年教育施設には、立地等各施設の特色を生かした体験活動を中心とした多くの活動プログラムがあります。そして、毎年たくさんの子供たちが、学校などそれぞれの団体の目的に沿って、様々な活動プログラムを実施しています。

その一方で、子供たちをめぐる状況は年々変化しており、利用する子供たちも多様化しています。それは時代や社会の移り変わりを、子供たちがあたかも鏡のように映し出しているようにも見えます。

このような変化に対応するため、活動プログラムの開発や改善をすることは、私たち国立青少年教育施設職員の中核となる業務の一つです。今般、3つの国立青少年教育施設（磐梯、中央、那須甲子）が行った活動プログラムの開発等の成果をまとめ、皆様にお届けさせていただきました。

この取組は、コロナ禍の中で始まりました。コロナ禍は子供たちにも、私たち青少年教育施設にも多大な影響を及ぼしました。本報告書は、コロナ禍を3施設なりに乗り越えようとした思いをカタチにしたものとも考えています。皆様方からの忌憚のないフィードバックをいただければ幸いです。

最後になりましたが、各施設の活動プログラムの開発等にあって、ご協力いただきました関係の皆様方に心から感謝申し上げます。

国立中央青少年交流の家
所長 藤原 一成

(お願い)

本報告書を引用された場合には、今後の参考とさせていただきたいと思いますので、下記までメールにてその旨ご連絡いただけましたら幸いです。

「地域の実情を踏まえた体験活動事業（特色化事業）」報告書

令和7年3月

執筆

(独)国立青少年教育振興機構 国立磐梯青少年交流の家
〒969-3103 福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1
TEL 0242-62-2530 MAIL bandai@niye.go.jp

(独)国立青少年教育振興機構 国立中央青少年交流の家
〒412-0006 静岡県御殿場市中畑 2092-5
TEL 0550-89-2020 MAIL fujinosato@niye.go.jp

執筆・編集・発行

(独)国立青少年教育振興機構 国立那須甲子青少年自然の家
〒961-8071 福島県西白河郡西郷村大字真船字村火 6-1
TEL 0248-36-2331 MAIL nasukashi-ki@niye.go.jp
